

尚学館 845 号室の灯り——石井美桑雄先生の思い出

宇野木 洋

本年（2010年）4月30日夕方——。

6時半を過ぎた頃だったろうか、私は帰り支度をして個人研究室を出た。鍵をかけてエレベーターの方向へと何歩か歩み出したところで、私の部屋の斜め向かいの石井美桑雄さん（先生とすべきなのだろうが、長年親しんだ呼び方に従わせていただく）の研究室に、いつものように、まだ灯りが点っていることに気づく。その途端に、そういえば全学ドイツ語部会の長老である石井さんに、一言、伝えておきたいことがあったのだ、と思い到りドアをノックした。研究室前の廊下で出会うことは度々だったが、石井さんの研究室をノックする機会は、そんなに多くあったわけではなかったのだが。

石井さんも帰り支度を始めていたのか、ドアの内側あたりにいらしていたようで、「ハイ」という返事に、「すみません、宇野木です」といった応答をしている途中でドアが開いた。

——ああ、宇野木さん。何ですか。

——例のドイツ語専任教員の連続的な定年退職の件なんですけど、ご存知のように、言語教育センターとしては「前倒し」人事を何とか実現しなきゃ、と思っているんです。それへ向けたドイツ語部会としての「要望書」を、何とか早目にまとめていただきたいんですけど……。

——そのことは聞いてます。気を遣ってもらってすみませんねえ。でも、この件は、私も当事者なんで、竹治（進）さん（法学部教授）に言って下さい。

——わかりました。僕からも伝えるようにしますが、でも石井さんからもプッシュして下さいよね。頼みます。

——うん。今度、ドイツ語部会が開かれるので言っときます。

——お願いします。僕が言うまでもないんですけど、立命のドイツ語教学の継承性の問題がかかっていますんで……。お願いします。じゃ、お先に失礼します。

——ハイ。

私は、職務上の言うべき懸案を石井さんに伝えたことに安心して、いつものようにエレベーターに向かって歩んで行った。1階へと動き出すエレベーターの中で、石井さんの声は相変わらず大きな、と少し笑ってしまった記憶がある。私は、何となく小声で話してしまったのに、石井さんは、いつもの響く声で答えられたので、訳もなく少し焦ってしまったことを反芻したのだった。別に内密にしなければならない事柄では全くないのだが、言語教育センター長なる役職に就かされており、今年度の大事な課題の1つと位置づけながらも、まだ教学担当常務理事や教学部長などにも一切諮っていない問題でもあったので、気の小さい私としては、一瞬、周囲を気にしてしまったようなのだ。

断わるまでもないが、全学で6人しかいないドイツ語専任教員の内5人までもが、2011年3月末退職の石井さんを筆頭に、2014年3月末までの4年間に定年退職を迎えるという「非常事態」に対する、言語教育センターとしての対策・要望に関する件だった。ちなみに、この追悼文を執筆している段階では、私の力不足もあって、この課題はまだ実現できていない。外国語担当教員定数整備

計画にも関係する複雑な問題でもあるのだが、この文章が発表される今年度末までには、何とか全学合意を得ることができているように尽力しなければならないと、今、改めて思っている。それが、本学のドイツ語教育に情熱を注ぎ続けてこられた、石井さんへの追悼にもなっていくはずだと考えるからだ。

* * *

こうした会話を交わしたのは、まさにゴールデンウィークに突入する前日だった。

そして、ゴールデンウィーク明けには、文学部事務長から、「今朝、言語文化パートの石井美桑雄先生のご家族より、先生が5月1日、脳内出血で倒れられ、手術をするも大変危険な状態にあることのご連絡がありました」という、思いもよらぬメールを受け取ることになってしまったのである。石井さんは昏睡状態から醒めることなく、6月5日、逝去されたのだった。

してみると、石井さんと最後に話した本学関係者は、もしかしたら私だったのかもしれないと、今になって思う。何がしかの「因縁」を感じざるを得ないところだ。

* * *

私が初めて石井さんにお会いしたのは、本学法学部に中国語担当教員として赴任した直後に開催された、外国語連絡協議会（略称・外連協。各学部所属の外国語担当教員が属する横断的組織。現在は、組織形態や果たすべき任務には相違が生じてはいるものの、言語教育センターがその役割を担っている）主催の新任者歓迎会の場だった。私は1984年4月赴任なので、すでに26年以上の歳月が経ったことになる。

幸いにもオーバードクターをたった1年経験しただけで就職が決まった私は、初めての本務校勤務ということで、不安と緊張の連続だった。非常勤講師として中国語を教えた経験はあったが、専任教員は授業担当以外にどんな仕事をしなければならないのか、ほとんどイメージできずにいた。そんな私を気遣ってか、ドイツ語専任教員の辻善夫さん（当時、法学部教授。後に、私が任用される際の選考委員長を務めていただいたことを知った。赴任当初の私の、文字通りの「保護者」だった。その後、政策科学部に移籍され、また本学との提携が進められた関西大倉高校校長も務められた。2007年1月に逝去された）は、私が歓迎会の会場（どこだったか、今では全く記憶にないが）に到着するや否や、すぐさま石井さんを紹介してくれた。

——この人は文学部のドイツ語の石井さんや。声がデカイので、どこにいてもすぐにわかる。敵に回すと面倒やけど、味方にすれば本当に頼りになる人だから、外国語に関する学内行政のことなんかは、この人にいろいろと教えてもらったらいいや。

「学内行政」という言葉を初めて知ったのも、実はこの時ではなかったか。大学の専任教員には、研究・教育以外に管理・運営などに関わる仕事があるとは思っていたので、それを学内行政と呼ぶのだろうとは推測したものの、そこに「味方」や「敵」が登場するようなシビアな場面が生じるなどとは全く思ってもみなかったので困惑し、自分に専任教員が務まるのだろうかとますます不安にかられたことを覚えている。とはいえ、この人はいわゆる「やり手」なんだろうな、ということだけは理解し、石井さんの名前を胸に刻んだのだった。

* * *

その後、外連協や、言語教育センターの前身である外国語教育センター、国際部の前身である国際センターといった教学機関に関わって、石井さんと一緒に仕事をする機会が幾度かあった。その度ごとに、物事をてきぱきとさばいていく石井さんの腕前に目を見張らされた。また、何かわからないことが生じて質問すると、いつも詳しく説明してくれた。こんなことまで何故よく知っているのだろう、と驚かされたことも数多くあった。

そんな石井さんの印象を、何かのはずみで中国語専任教員の岡田英樹さん（当時、文学部助教授。その後、教授に昇進され、2010年3月定年退職。私が岡田さんに次ぐ本学2人目の中国語専任教員だったこともあり、赴任当初の私にとってはもう1人の「保護者」でもあった）に語ったことがあったのだが、その際の岡田さんの言葉も忘れられない。

——教授会に提出された分厚い学内行政文書の全てを、石井君ほど隅から隅まで丁寧に読み込んでいる人は全学で他にいやしないんじゃないか。いろんな問題について、過去の経緯なども含めてホントによく知ってる人や。

本学の現在の課題が何で、それが何故課題として浮上してきたのか、それを例えば外国語教学に即して具体化すれば問題の焦点はここにある、といったことを石井さんに教えてもらったことが幾度もあったのだが、岡田さんのこの言葉を聞いて、なるほどと肯かされたものだった。

それ故、これまで「敵」として対峙する場面に遭遇することが一度もなかった点は、やはり幸いだった言うべきなのだろう。と言うより、理不尽なことや原則を逸脱したことに関しては敢然と立ち向かい発言するが、状況がよくわかっていない発言などに対しては、常に蒙を啓いてくれる「味方」の立場にいたのが石井さんだったのだ。私が何かの提案をした際に、その内容を丁寧に吟味した上で、提案に含まれる弱点や不備については強い指摘を受け、

——宇野木さんも、こうしたことは知っておいたり考えてみたりしておかないと……。といった叱咤激励を受けたことはあった。だが、その提案が、学生や教学のために多少なりとも有意義な点が含まれている場合には、「味方」として必ず応援してくれるのである。石井さんの声の大きさを頼もしく思ったことも度々だった。

所属学部や専攻分野が異なっていたこともあって、石井さんの研究・教育における業績に関わっては、ほとんど接点を持ちようがなかった。そのため石井さんのことを思い出そうとすると、何故か「学内行政」という言葉が浮かんでしまうのである。その背景を、少し自分に引き付けてたどり直してみた次第である。石井さんのたった1つの側面のみに関わる思い出話に過ぎない点を、改めてお断わりしておくしかない。

* * *

種々の学内事情によって、本年4月より、私は、26年間在籍した法学部から文学部に移籍することになった。

——宇野木さん。今度、文学部に来るんですってねえ。聞きました。私は定年まであと1年だけど、よろしく頼みますよ。

移籍が最終決定する少し前に、石井さんからこんな声をかけられた。たまたま一緒になった尚学館のエレベーターの中だったと思う。同じ学部の同僚として過ごした期間は、実質的にはたった1ヶ月に過ぎなかったことが信じられない。

今日も帰りがけに、「石井美桑雄」というプレートが掛かっている研究室の前を通る。ドアの上部のガラス窓から灯りが漏れていないことに気づいて、つい不思議な気がしてしまう。私が帰る時間帯には、たいていの場合、灯りが点っていたはずなのに、と改めて思わされる。時には、クラシックの音楽さえもが微かに聞こえていたのに……。

石井さんがもうこの世にいらっしゃらないことを、毎日、確認しなければならないのが寂しい。来年4月には、「石井美桑雄」というプレートも別の名前が変わるのだろう。でも、石井さんの研究室が845号室であったことを、そして、そこにはいつも灯りが点っていたことを、絶対に忘れることはできない。何かの役職に就いた際に、その「学内行政」の仕事のシンドさに疲れきっていた私を、大学の専任教員としての「原点」を思い起こさせることによって、いつも励ましてくれる灯りでもあったのだから。

(本学文学部教授)